



## 宇宙はどこまで明らかになったのか

福江 純, 栗野論美 編

ソフトバンク クリエイティブ出版 952 円+税 242 頁

解説書  
お薦め度  
☆☆☆☆

書評をお願いしますと言われて軽く引き受けてみたものの、これが書けない。普段はあれこれと書評じみたことを言っているのに、何で書けないのか。しばらくして、ははーあんと気がついた。こりゃあ読書感想文と同じじゃあないか。書評というのはある程度の見識があって書けるものだと思うのだが、考えてみればそんなもの自分にはない。それが大それたことを引き受けたのだから、難しげな本を渡されて感想を書けと手に余る宿題を課せられたようなものである。私は宿題は大の苦手である。だから書けない、なんてことは表立っては言えないので、まあこうして四苦八苦言っているわけである。

「難しげな本」とは勢いで言っただけで、本書からはそんな印象は受けない。難しいと思う人には難しいだろう（何だってそうだ！）が、興味をもって読む人にとっては現代天文学の最前線を垣間見させてくれる好書という気がする。だから独断と偏見による「お薦め度」は四つ星にしておいた。

本書は「サイエンス・アイ新書」の一冊である。私は新書の能書きやら前書きやらを読むのが好きで、いつものごとくまずはそこから目を通した。ふむふむ、新書発刊の目的は、高校生や大学生、社会人を対象にわかりやすく解説することか。ああ、「わかりやすく」というのは実に難物である。思い返せば、わかりやすいと銘打った受験参考書でわかりやすかったものなんてなかったなあ。いやいや、本書がその手の本と同じというわけではない。もともと天文学に興味があり、そこそこで情報を仕入れている人にとってはこの上なく面白く、気づかされることが多く、楽しめる本であるに違いない。それでも高校生にはちとレベルが高

く、大学の教科書などの文体に慣れ親しんだ人のほうが読みやすいだろう。（本書では見られないが、「一般に」なんてのはちっとも一般的な表現ではないのだ。）

おおっと喜んだのは、目次のすぐ後に「執筆者プロフィール」があったことだ。本というのは人間の活動の所産。書いた人が見えるとそれだけで親しみが増すというもの。でも、著者紹介はたいいてい末尾にあってしかも字が小さい。ところが、本書は4頁を費やして大きな字で執筆者を紹介している。こんな形で冒頭に人間臭さが見える紹介があるのはたいへん気に入った。でも顔写真が欲しかったなあ（☆ひとつ足りない要因の一つはこれ）。

さて、肝心の内容を。本書は二部構成になっている。第一部「最新天文学入門」では宇宙カレンダーを冒頭に置き、以下太陽系から遠方に向かって視点を移し、計25の話題を取り上げている。見開き一頁にまとめられた各話題を見ていけば、現代天文学が描き出す宇宙像の概観がつかめるようになっている。第二部では系外惑星、GRB、宇宙論等最前線の話題八つを取り上げ、各分野の気鋭の研究者が解説している。難易度に幅があるが、どれも生き生きとした現場の息吹を感じ取ることができ、さわやかな読後感がある。感化されて自分もこの分野にと思う若人が現れても不思議はなさそうである。各執筆者と編者の資質の高さが生み出した雰囲気であろう。「旬」のうちに読むことをお薦めする。

ところでこの「宿題」、☆いくつももらえるだろうか。

濱根寿彦（ぐんま天文台）